

## 現代の生活環境における行動研究

佐野友紀<sup>1</sup>, 青柳 肇<sup>1</sup>, (故)佐古順彦<sup>1</sup>, 根ヶ山光一<sup>1</sup>, 山本登志哉<sup>1</sup>, 小島隆矢<sup>1</sup>, 佐藤将之<sup>1</sup>,  
石垣 文<sup>1</sup>, 杉本英晴<sup>1</sup>, 河原紀子<sup>2</sup>, 村上八千世<sup>2</sup>, 三木香織<sup>2</sup>, 大熊美佳子<sup>2</sup>, 喜多濃太香<sup>2</sup>,  
白神敬介<sup>2</sup>, 佐藤真理恵<sup>2</sup>, 若林直子<sup>2</sup>, 倉斗綾子<sup>2</sup>, 遠田 敦<sup>2</sup>  
(<sup>1</sup>早稲田大学人間科学学術院, <sup>2</sup>早稲田大学人間総合研究センター)

## ○はじめに

現代の生活環境では、健康で平均的な大人を基準にして構築されている。このため、子どもや高齢者など生涯発達各段階にからみると適切な環境が提供されておらず、その意味で「環境弱者」として位置付けられる。本プロジェクトでは、環境と対処行動に不整合を生じる「環境弱者」について、現代の生活環境における、生涯発達各段階での空間行動に関する事例研究を行うことで、心理学・建築学の立場から学際的・多面的に検討を行った。特に1) 理論と実践、2) 環境の大小、3) 発達の段階の軸によって、各研究を位置づけ関連性を整理した。

## ○生活環境弱者としての子どもの事故

子どもの生活環境の差異と事故の発生、理解の関係をとらえるために、子どもの事故という問題について、保育園における彼らの行動に焦点化し、いくつかの側面から分析した。

所沢市内の保育園移転に伴う園児の新環境への適応について、園舎の移転に伴い、子ども達が新奇環境にどう出会い、それにどう馴染んでいくかを調査した。リスクに対し、子どもは工夫や協力をして対処した。また、新奇事態で多様な遊び方を探索するが、その多様性は徐々に減退すること、減退は保育士がそばにいる状況でより顕著なことで、などが明らかになった。

保育園における事故の発生実態とその地域差について、保育所における離島と都市部の子どもの事故の実態比較として、沖縄離島と所沢市の災害報告書の比較を行った。その結果、沖縄では事故が少ないが骨折など重度な傷害が目立っていた。軽度な傷害については「傷害」視されないためという示唆が得られた。

保育園園庭における園児の泥んこ遊びについて、大阪府内の保育園で泥んこ遊びの様子をビデオ撮影し、その特徴を分析した。その結果、2歳児に比べて4歳児は汚れることを利用して他者とのやりとりを楽しみ、また未知の不快感や、快適さに積極的に挑戦する傾向があることがわかった。

保育園における危険の認識の年齢差について、保育園内に存在する危険への認識を写真・絵を提示して尋ねたところ、年少児に比べて年長児の方が危険の認識は広がり、かつより具体的・状況対応的になっていることがわかり、危

険の認識の発達的特徴が明らかにされた。

## ○生活環境弱者としての子どもの施設整備

保育施設は子どもが1日の大半を過ごす場であり、自宅では経験出来ない環境での他者との交流を通して様々な成長をすることが出来る。本研究では、保育施設における高低差を含む環境下で、子ども間に見る・見られるという視線の交差や交流などの行動を観察することで、環境が子どもたちの遊び行動や交流に与える影響を明らかにした。

1歳児が園庭を見下ろせる窓から園庭を見る行為は、園庭での上のクラスの子どもの体操などのイベントの開催に影響を受け長くなった。その時の姿勢も立て膝など通常見られないものが見られた。このように、平面的な保育室では起こりえない上下間の視線の交流や行為が見られた事で、高低差の視界交流を伴う環境が1歳児に新たな刺激を与えて、行動を誘発していると言える。

## ○環境探索弱者としての経路移動者の空間把握

都市における空間の複雑化により、経路移動のための認知地図形成が不十分になり、目的地まで経路移動が困難になる場合がある。ここでは、風景等の環境情報・地図などで提示された情報と認知地図形成について都市空間で被験者実験を行い、格子状街路と非格子状街路では認知地図の形成・経路探索方策が異なる事、経路探索時に提示した地図情報の違いにより、経路選択時の迷い感、確信度が異なる事を明らかにした。このように街路を空間的、しつらえ的に多様にする事で空間把握に役立つ事が明らかになった。

## ○生活行動弱者からみた環境の安全安心についての意識と対策行動

災害・犯罪・生活事故・交通事故など、生活環境との不適合により生じる安全安心を脅かす諸事象に対して、日常の意識や対策行動をテーマとして、関連資料調査、質問紙調査およびその分析を行った。関連資料から、わが国の防災・防犯などに関する啓発事業・市民活動の中では、危機感・不安感を煽るようなコミュニケーションが行われる場合が少なくないが、その是非に関する考え方が分野によって異なることを把握した。防犯分野では、犯罪不安は警察や行政への不信につながりかねないためか、いたずらな恐怖喚起は危惧されるべきという認識が共有されているのに

対し、防災分野では恐怖喚起のマイナス面に無頓着であり、内閣府による「防災白書」においても切迫感を高めるような普及啓発が推奨されている。この問題について検討するため、「生活環境の安全安心」に関する質問紙調査データに対して、統計的因果分析を行った。その結果、自分が居住する生活環境が災害や犯罪などに対して「危険」「不安」という認識は必ずしも防災対策などの「対策行動」を促進させないことが分かった。「切迫感を高めるような普及啓発」はいたずらに恐怖喚起を行うだけであり、その弊害を考える必要がある。

#### ○文化環境変化からみた子ども行動に対する許容度

韓国の幼児を持つ母親の認知について調査し、日本との比較検討を行った。使用した尺度は、危険な場面での保護者の幼児一人ですせる行為（たとえば、信号のない横断歩道を一人で渡る、など7項目）、普段の子ども一人での行動範囲（たとえば、遊び場など5項目）である。その結果、危険場面での許容度と子どもの行動範囲には有意な関連が見られ、危険対処能力があると判断していると行動範囲も広がっている。さらに日韓とも危険場面の許容度は年齢とともに大きくなっている。しかし、日本と韓国の許容度の差異を詳細に比べると以下のものであった。日本では年長と年少および年少と年中には差が見られるが、年長と年中には差がみられなかった。一方、韓国では、年長と年中・年少の幼児には有意差が見られ、年中と年少の間にも有意差が見られた。このことは、日本では年中になると許容度急激に増し、その後は大きな違いが見られないが、韓国では、年長になるまで、緩やかに許容度が増していき、年長になると日本より許容度が高くなることが示された。また、韓国では幼児と行動を共にする祖母の割合が日本より多いことが特徴であった。両国の幼児の社会的なネットワークのあり方の違いが関係しているであろう。今後、文化差の問題をより深めていく必要がある。

#### ○文化という環境の理論的な位置づけ

人間の行動を理解する要因のひとつとして想定されるものに「文化」が存在する。文化研究では「国籍」や「境界線」など、いわゆる客観的に確認可能な指標で文化の境界を画定することがしばしば行われるが、それはあくまでも便宜上のことに過ぎない。ある個別の「文化」というものはその外延（地理的領域・成員の範囲・時間的範囲）も内包（文化を分ける基準・複数の基準間の関係など）も常に曖昧であり、仮にそれらを機械的に固定してみたとしても、ある「文化集団」とされたものの内部には常にその基準に当てはまらない例外や、時間的な変異などが入り込んでしまう。我々の「差の文化心理学」ではこのような文化の固定的実体化から出発する見方を離れ、常に変動しつつある個別の相互作用の中にその都度生成するものとして、ダイ

ナミックに文化を把握する視点を採用する。このとき出発点となるのが「個からの見えの中に文化がどう立ち現れるか」という問題である。そして対象となる事物が次の条件を持つときにそれは文化として現れると見る。

1. それが人間（⇔他の動物種）の意図的活動の産物として現れるとき（文化心理学的文化観に対応）。2. その意図的活動が、当該個人の個人的活動としてではなく、他の人々（範囲は必ずしも固定せず）と共有された、共同性を持つものとして現れるとき。3. その共同性が、それとは異なる異質な共同性との対比に於いて、ある限定的な個別の集団に帰属するものとして現れること（比較文化心理学的文化観に対応）。このときある事象は主体に対し、「文化」のものとしてその意味を現し、そのことによってその主体は現された「意味」に反応する文化的主体となる。環境としての文化とは、そのようなものとして成立するものであり、個体の外部に固定的実体として存在するものではない。同時に個体の内部にも存在しない、共同主観的な現象として成立するものである。

#### ○まとめ

本研究では、心理、建築分野の多面的視点から「環境弱者」をとらえることで、現代の我々を取り巻く生活環境における諸問題を学際的・多面的に検討した。特に、生活環境弱者の諸外国との文化比較を行うとともに、環境弱者の問題を構造的に整理した。また、文化の理論的な位置づけ、ソフト・ハードの対策を、ディスカッションを通じて考察した。

#### 【研究成果・業績】（一部）：

- 根ヶ山光一：保育園・学校における子どもの事故の実態—災害報告書資料の分析を通じて— 発達心理学会第18回大会発表論文集 285, 2007
- 佐古順彦：ロードマップテストにおけるルート歩行の言語的記述の分析、日本心理学会第72回大会、pp.1445、2008、日本心理学会
- 佐野友紀ほか：経路探索に用いられる情報が、歩行者の「迷い感」に与える影響—日本建築学会大会講演梗概集— 2007
- 小島隆矢ほか：住居・地域の安全・安心についての意識と対策行動に関する統計的因果分析、日本建築学会総合論文集、第7号、2009
- Yamamoto,T., & Takahashi,N., 2007, Money as a Cultural Tool Mediating Personal Relationships: Child Development of Exchange and Possession, Valsiner,J. & Rosa,A. (eds.) Cambridge Handbook of Sociocultural Psychology, Cambridge University Press, New-York, 508-523
- 村上八千世・根ヶ山光一、2007、乳幼児のオムツ交換場面における子どもと保育者の対立と調整—家庭と保育所の比較—、保育学研究、45、19-26、
- 根ヶ山光一・村上八千世、2009、子ども事故：その心理と行動、日本発達心理学会第20回大会発表論文集、46-47、
- 根ヶ山光一、河原紀子、福田須美、星順子、2008、家庭と保育園における乳幼児の行動比較：泣きを手がかりに、こども環境学研究、4、41-47、
- 根ヶ山光一・河原紀子、2008、離島と都会の保育園・小学校における事故の比較—日本心理学会第72回大会発表論文集、1223、